



広幅の綴織織機で綴帳を製造

工場探訪

丹後テクスタイル

手織りに近いモノ作り追求

継続することによって時代にマッチ

住江織物グループの丹後テクスタイル(京都府京丹後市)は、住江織物の祖業である手織り綴帳(たんつづ)の技術を受け継いできた。綴織綴帳(つづれおりどんちよう)、フックガンを使った綴織・綴帳なども製造する。時代に対応しながら手織りに近いモノ作りを続けてきたことが強みになり、多様な綴織・綴帳作りに対応できる希少なメーカーになっている。

「丹後綴通」がブランドに

オンリーワンのモノ作り

丹後テクスタイルが生 械でパイルを基布の裏面摩するイージーオーダー から打ち付けるラグド・ラグ「イテン」の売れ・ラグ製法で作られたシ行きが堅調だ。フックガン リースで、色数の制限がないというピストル状の機 ないことによる繊細で多

様な柄を表現できる。

2×2 畳サイズの小売価格が10万円を超えるアップパズルのラグで、2012年の発売後、ハウジングルートや高級家具店を通して住宅向けを中心に販売してきた。ここ数年は高層マンションの共用部や、プティックの試着室などコントラクト用途にも採用が広が

る。同社は、フックド・ラグ製法で製造したカーペットを「丹後綴通」として打ち出す。フックド・ラグの自動織機14台を保有して生産する一方、フックガンを100台以上持ち、職人によるハンドフックを行う。自動織機では、30×30センチ角に最大



フックガンを使って基布にパイルを打ち付け



経験が求められるハンドフック



フックド・ラグ自動織機

約4千粒を打ち込むのが限度だが、熟練職人によるハンドフックでは、打ち込むスピードを調整することで同2万粒が打ち込み、よりきめ細かな表現ができる。ハンドフックに携わるスタッフは約半年間、均等な間隔で直線的に打ち込む練習を繰り返す。その後、比較的容易なフックド・ラグから担当して腕を磨く。でも採用が増えている。

手織り綴通からスタート

フックガンで時代に対応

同社は、住江織物の手織り綴通の製造を担う網野工場として1947年に設立された。1983年創業の住江織物は、手織りの敷物作りから事業を始め、同社は祖業を担う形になった。1968年に皇居内殿舎の

綴織綴帳も柱に

手織りで表現高める

58年に住江織物の京都工場から綴帳部門を移設して綴織綴帳の生産を始め、現在も続ける。33センチ幅と、25センチ幅の綴織機2台があり、1年におよそ1枚のペースで国立劇場や大阪歌舞伎座などの綴帳を受注している。手織り綴帳は完成まで長くて1年ほどかかるが、多い時は千色ほどの糸を用いて手作業で作るため、細やかな表現ができる。綴通と同じくフックガンを使った綴帳作りも行っている。

技術継承に力

ふるさと返礼品へも

同社の従業員は61人。

柔軟に、そして粘り強く、これからも継続していく。

イージーオーダーラグ「iitten」(イッテン)シリーズ



対応力に難しさがあつた。そのため、1963年に手織り綴通の持つ表現や風合いを残しながら、製造日数の大幅な短縮を可能にしたフックガンによる丹後綴通の生産を始めた。京都迎賓館

設で使われる敷物を担ってきた。迎賓館赤坂離宮の手織り綴通は1年半かけて納品したという。手織り綴通の需要は特別な場所に使われることが多く、さらに高度経済成長期で建てたワインダーも内装化して対応力を高めている。ここ数年、毎年新入社員を採用する。2023年は男性2人、女性2人が入社した。08年のリーマン・ショックなどで経営が厳しい時期があり、中間層の従業員が少なく、技術継承や機械整備スタッフの育成に力を入れている。技術継承では、手織り綴通が特に課題に挙がる。需要自体が少なく、「練習だけでは身に付かないことも多い」と言う。仕事をため、50×80センチの手織り綴通をふるさと納税返礼品にできないか、京丹後市と協議している。